

(二十三) 承前

「三年前に死んだ源治郎兄さんは、病気で亡くなったんじゃないやありません……」
光が言う。

「どうして、亡くなったんですか？」

遊齋が訊ねる。

「毒です」

「風邪ではなかったと？」

「はい。毒を盛られて死んだんです」

「いつたい、誰が毒を盛ったのでしょうか」

「母と、兄です」

「お妙さんと、進三郎さんということでしょうか——」

「そうです」

光がうなずく。

「何故ですか？」

「兄の源治郎ですが、実は父の本当の子ではなかったからです」

「ほう……」

遊齋は、興味深そうに低い声をあげ、

「産んだのは、おそのさん？」

そう問うた。

「だと思えます」

「それで、進三郎さんとお妙さんが、源治郎さんを殺したと？」

「はら」

「もう一度うかがいますが、それはどうしてなのでしょう」

「母は、自分の本当の子である進三郎兄さんに、ありた屋を継つがせたかっただと思えます……」

「なるほど、それで筋は通りますが、お妙さんと進三郎さんを殺したのが、嘉兵衛かへえさんであるというの、どういうことなのでしょう——」

「母と兄に毒を盛られて殺された源治郎が、実は嘉兵衛の子供だったからです」

「それは、つまり、嘉兵衛とおそのさんが密通していたということになります——」

「その通りです」

「それは、あなたが頭の中で考えていることですか、確かな証拠があつて、言っていることですか……」

「証拠はありません。でも、間違いないことだと思つています」

「間違いないという根拠は何なのですか——」

「証拠は根拠は、と問われても困るのですが、わたしはそう確信しています」

「確信？」

「この話が出た時、父は否定しませんでしたから——」

「その話の出どころは？」

遊齋が問うと、光は言い難にくそうに口ごもった。

「おっしゃりたくないのですね」

「母です」

覚悟を決めたように、光は言った。

「お妙さん……」

「ええ、母がそう言っていたのです」

「あなたに？」

「いいえ、父にです」

「仁左衛門さんということですね」

「ええ」

「何と言っていたのですか？」

「源治郎は、あなたの子ではないんでしょうと——」

「仁左衛門さんは、その時、それを否定しなかったと？」

「はう」

「どうして、あなたがそれを知ったのですか？」

「立ち聞きをしてしまったのです」

「偶然に？」

「ええ。家の裏手に土蔵があるのですが、その中で、父と母が話をしているのを耳にしたのです。土蔵の横に、桜が生えていて、その桜が咲きはじめた頃です。確か、お富とみが、土蔵の桜がもう三分咲きですよと教えてくれたので、見に行つたのです。その時に、土蔵の中から声が聴こえてきたのです。父と母の声でした」

「ふたりは、あなたが立ち聞きしたのを気がついたのですか——」
「たぶん、気がつかなかつたと……」

何か、聴いてはいけない話のような気がして、光はすぐにその場を立ち去つたのだという。

「家の者に聴かれたくない話は、父も母も、よく土蔵でしていましたので——」

「それが、いつのことですか？」

「三年前、兄源治郎が死ぬ半年ほど前のことだつたと思います」

「毒の件については、どうして知つたのです？」

「やはり、土蔵でふたりが話をしているのを耳にしました」

「それも、偶然に？」

「いえ、これは、知っていて、立ち聞きをいたしました」

「どういうことですか？」

「父と母の会話のことが、あれから頭から離れなくなつて、ずっと気になっていたので。このことについて、兄は知つているのかと、そういう眼で見えておりますものですから、母と兄が、何かを隠しているのではないかということを、なんとなく感じとつてはいたのです——」

そういう時に、妙と進三郎が、申し合わせたように、土蔵の方へ姿を消すのを見たのだという。

それで、少し間を措おいて、土蔵の方へ足を向けたのだという。

そこで耳にしたのが、

“いい薬が見つかりましたよ”

という、進三郎の声と、

“どんな薬だい”

と訊ねる、妙の声であったというのである。

“飲んでも、すぐに死ぬわけじゃあないんだけどね。まず風邪のような症状が出て、その後熱が出て、そのまま死ぬ——”

「それを耳にしたのはいつですか——」

「源治郎兄さんが死ぬ半月ほど前だったと思います」

落ちついた声で、光は言った。

「で、進三郎さんとお妙さんを殺したのが、嘉兵衛だというのは？」

「その時の土蔵での会話で、“源治郎の本当の父親は番頭の嘉兵衛だからね”と、母が言うのを耳にしましたので——」

“あんなやつに、ありた屋を渡すわけにゃいかないよ”

妙が、進三郎にそう言っていたというのである。

「で、お妙さんと進三郎が、自分の息子で、ありた屋を継ぐものとはばかり思っていた源治郎に、毒を盛ったことを知った嘉兵衛が、息子の仇を討つために、ふたりを殺したのではないかということですね」

「その通りです」

光がうなづくのを見て、

「ふうん……」

と、遊齋は腕を組んだ。

「何か？」

「それにしても、まだ、幾つかわからないことがありますね。それに——」

「それに？」

「気になることがひとつ——」

「何でしょう」

「あなたのその身の上です」

「身の上？」

「あなたが、今、口になさったことが、全部本当のことだとするなら、あなたの身の上にも危険がおよぶかもしれないということですね……」

「わたしに、危険？」

「お妙さんと進三郎さんを殺したものが、もしかしたら、あなたもふたりの仲間であろうと考えて、何かやってくるかもしれないということですよ……」

「まさか」

「いいえ。充分に考えられます」

急に、光の顔に不安の色が浮かんだ。

「いそいでもどらねばならないとおっしゃっていましたが、今日は、帰らずに、ここに残っていただきますよ」

「今日、ここに？」

「このあと、土平どへいという飴売あめうりりがやってきましたが、この土平にあなたを守らせましょう」

「わたしを？」

「そうです。何事もなければ、それでいいのです。もし何かあった時には、土平があなたを守るでしょう」

「……………」

「ひと晩です。わたしの方は、この件については、今晚、あの赤い櫛くしを使ってある呪法ずほうを試みますつもりでいます。その結果次第ですが、しばらく、土平にあなたの身体からだをあずけることにいたしましよ……」

有無を言わせぬ口調で、遊斎は、そう言ったのである。

(つづく)